

833-6



俳諧資料カード	
年代	天保十四年
編者 (筆者)	文三
書名	俳諧十巻
備考	初巻

(下垣内 蔵)



類題十萬句集初編秋之部

秋之上

七月初丁

初秋三丁

冷五丁

七夕八丁

星別

梔葉

衝突入

燈籠

文月

殘暑四丁

初月

星今宵七丁

天川

盆

迎火

切竈

左秋

秣蠲

稻妻

星合

貸小袖九丁

魂奠

魂棚

臥馬

今朝秋二丁

初嵐

花火六丁

星迎

左琴

生身魂十丁

棚經十一

連飯

井山村
河村

施餓鬼 十二

踊 十三

土倭入 十六

霧

木槿

藤袴

女郎花 九七

荻 九

小車

稻花

早稻

送火 十四

忘扇 十四

露

秋風

常山花

桔梗

鼠尾草 九七

芒

蓼花

蓮實飛

鉅豆

墓參

二百十日 十八

露時雨 十八

桐一葉 九一

薜

芙蓉 九六

野菊 九二

花芒 九二

艸花

落

水

盆 十五

相撲 十五

露霜 九二

柳散 九二

蘭

秋海棠 九九

荻

水引 九三

西

錢 九四

蚊 九五

秋蝶

蜻蛉

鈴虫

蟬出鷹

案山子

八月 四十一

長夜

初寒 四十五

待宵

秋之中

秋蟬 九六

蚤

茶立虫

鳴子

鳴子

八月 四十二

秋寒 四十二

野分 四十四

秋月 四十六

小望月 四十六

蜻

烏

竈

鳴子

鳴子

田面日

朝寒

秋夜

三日

月見

秋螢

蓼虫鳴 九八

蟬

引板

仲秋

夜寒 四十三

秋雨

五日

月

名月

今日月四十九

月今宵五十

十五夜

十六夜

月

月雲五十一

月雨

放生會

放鳥

駒迎

尾花五十二

紫苑

雞頭五十四

木犀

蕎麥花五十五

花野

大蓼

蓼穗五十六

刈萱

萱穗

芦穗

薦

木通

鬼灯

唐芋五十七

稻

懸稻

稻川

中稻

晚稻

稻舟

稻穗

綿取

大豆五十八

粟

黍

芋

苳

李子五十九

草籽

茵六十

卜治

松茸

松露

蟋蟀

蚯蚓六十一

渡

燕歸

雁六十二

鴟六十三

鴟

啄木六十四

鷓鴣

小雀

掠

鵲鴿

鳩吹

稻雀六十五

鵲

鹿

落六十六

汝六十七

鰕

彼岸

砧

擣衣

彼

秋池下

九月七十

長月

舛市

后月

十二夜七十一

月名殘

秋山

秋雲七十二

秋七十三

秋水

秋霜

秋空

菊七十四

白菊七十五

十日菊

殘菊七十六

秋

菊
酒

草紅葉

椎實

朽實

𪛗
𪛗

新蕎麥

柚味增

秋名殘

末
枯

柿紅葉
八十二

落栗

山菜羹

今年米

新酒

秋暮

末秋

梯

柞紅葉

草
夷

鳥
氏

田

酴
醾
醕

行
秋

冬
近

紅葉

袖

稻

梅嫌

落穗

濁
酒

九月尽

秋題不知

子集

類題十萬句集初編秋之部上

一馬菴一具校合

文七
月月

七月やちうく暑く 燭 酒
文月よ来と痛く 三 松次郎

札月
棠邨

海月とすうはるはるの味

夕山

新巻の面より成文の如

五臺

乃月や雲の居屋より梵痛の五

古
琴

後より来りて月の夕にれ

通流

二月之孫安子孫子子子子子

字彙

初秋

銀屏子熟の香やけきの秋
 待てぬ人の事も床やけきの秋
 暎一ツ燈のえたりけきの秋
 後頭子髪とけきけきの秋
 山の秋の自れや柳の香
 初秋や夕照をみる人の心
 山の秋や紅葉をみる人の心
 初秋や紅葉をみる人の心
 初秋や紅葉をみる人の心
 初秋や紅葉をみる人の心
 初秋や紅葉をみる人の心

涼谷
 市席
 葉錦
 相回
 四明
 子輅
 素心
 素心
 素心
 素心
 素心

残暑

初秋や百舌の鳴き声
 初秋や百舌の鳴き声
 初秋や百舌の鳴き声
 初秋や百舌の鳴き声
 初秋や百舌の鳴き声
 初秋や百舌の鳴き声
 初秋や百舌の鳴き声
 初秋や百舌の鳴き声
 初秋や百舌の鳴き声
 初秋や百舌の鳴き声

青龍
 谷
 蒲平
 天山
 白起
 乐有
 川長
 波文
 陶惘
 荇蔕
 雄嶺

稲妻やあられもするや蚊の種
 以のりや橋を来るの原の道
 以のりや松の木持てぬおもて
 稲妻やあられもするのゆり
 稲妻やあられもするの舟より
 稲妻やあられもするの舟より
 稲妻やあられもするの舟より
 稲妻やあられもするの舟より
 稲妻やあられもするの舟より
 稲妻やあられもするの舟より

常陸

山 彦
 文 里
 南 山
 石 龍
 玄 子
 了 庵
 素 必
 佐 上
 純 乙
 古 泉

稲妻やあられもするや蚊の種
 以のりや橋を来るの原の道
 以のりや松の木持てぬおもて
 稲妻やあられもするのゆり
 稲妻やあられもするの舟より
 稲妻やあられもするの舟より
 稲妻やあられもするの舟より
 稲妻やあられもするの舟より
 稲妻やあられもするの舟より
 稲妻やあられもするの舟より

珍 堂
 舞 母
 多 女
 嵐 高
 庚 年
 史 子
 田 華
 月 規
 全 堂
 長 彦
 謝 堂

いろは

春日大明神

星迎

星別

天の川

星乃や呼ぶ者なり舟と爲
布一官や不三龍傳はる星
星達の飛龍参りい終る地
及妻の光る所や星の参
者星子人のあうむおこる
いろは書ふも終る星の参
者乃ち子船も出まう星
星の参る所や呼ぶ者なり
参る者なり必る星の参
者乃ち参る者なり星
参る者なり参る者なり

其席
如仙
荷乙
雨考
聖浦
雲翠
如旭
棋海
何弓
文海
文光

初めは星の参る所や呼ぶ者なり
何れは星の参る所や呼ぶ者なり
星の参る所や呼ぶ者なり
人亦も参る所や呼ぶ者なり
ち何の参る所や呼ぶ者なり
何れは星の参る所や呼ぶ者なり
月も参る所や呼ぶ者なり
星の参る所や呼ぶ者なり
古歌の参る所や呼ぶ者なり
雲の参る所や呼ぶ者なり
山の参る所や呼ぶ者なり

去子
兼往
雲々
壯賞
眉意
文光
羽白
笑塵
不曲
長衣
芳蔭

和歌集

難の所すくはるるや新海
 ても川原志あはれをわたりし
 某種屋の地蔵よりやとも川
 とも移る月も入る天の川
 とも川先を流るる這入る星
 雲散れりやうきやうき新海
 宵の月を流るる永くとも川
 須磨の河を流るるこの川
 新井の河を流るる新海
 晴れわたるる新海
 峠一つ散るる月

舞女
 今
 多よ女
 大梅
 乙負
 一具
 一梅
 一松
 昔谷

負小袖

立琴

梶葉

秋

長き下を流るる果あり新海
 杉原を流るる新海
 とも川先を流るる永くとも川
 須磨の河を流るるこの川
 新井の河を流るる新海
 晴れわたるる新海
 峠一つ散るる月

吟夜
 運内
 原谷
 今
 葉路
 栗笑
 多よ女
 白人
 芝菜
 久鬼
 一具

金

魂真

楊のそとに館ひけりや討め
 行燈を懐くつやや多き
 多き星浮山よりみひき
 ありく多きも子枕
 寄来はや山のうも多き家
 能人の所をわたり魂真
 玉奈桑も凡持山うけり
 行燈子孫より負し魂真
 魂真昆難多き名く
 大珠の夢より魂一人
 妙是く母の葛籠に魂真

高方
 正令
 赤夢
 唯慎
 吟霞
 札月
 一南
 西阜
 今
 古

生身魂

衝突入

魂奈無くは程う月をみり
 玉奈己のよき世なり
 お中よりあふや玉奈
 玉真者の教りて手白
 柳丈の多ね羽織や魂
 義枝や名も夢中玉あり
 二粒の二身旅のや生身魂
 わさく蓮のさき生身魂
 枝をさぬる傳へ生身魂
 するち角實をさる生身魂
 して人の夢を魂とて成る

如仙
 松奈
 乙真
 易足
 斗筵
 松窓
 素太
 易足
 源谷
 芳蘇

蓮飯 切馬

竹の葉の物やうと云
揚ぐの葉をあげて煮くうと云
煮たてをえと云の燗燗が
燗燗や蓮の葉を煮たてと云
煮たてを煮たてと云と云
花押の燗燗や煮たて
燗燗と切子の葉を煮たて
燗燗の葉を煮たてと云
燗燗の葉を煮たてと云
燗燗の葉を煮たてと云
燗燗の葉を煮たてと云

蓮の飯や燗燗汁燗燗を煮たて
燗燗の飯や燗燗汁燗燗を煮たて
燗燗の飯や燗燗汁燗燗を煮たて
燗燗の飯や燗燗汁燗燗を煮たて
燗燗の飯や燗燗汁燗燗を煮たて
燗燗の飯や燗燗汁燗燗を煮たて
燗燗の飯や燗燗汁燗燗を煮たて
燗燗の飯や燗燗汁燗燗を煮たて
燗燗の飯や燗燗汁燗燗を煮たて
燗燗の飯や燗燗汁燗燗を煮たて

米斗 減久

施餓鬼 送火

墓参

金月

子孫の葉を煮たてと云
燗燗の葉を煮たてと云
燗燗の葉を煮たてと云
燗燗の葉を煮たてと云
燗燗の葉を煮たてと云
燗燗の葉を煮たてと云
燗燗の葉を煮たてと云
燗燗の葉を煮たてと云
燗燗の葉を煮たてと云
燗燗の葉を煮たてと云

民校 羅周 斗米 友之 玄子 二丘 横海 吟露 五丘

多の月世ひ市市一人の来
 形をの事もあつて多の月
 乞食の残信物おや多の月
 あつて中をてんや多の月
 けり憐れを食しを食しを食し
 他ちのあつてかたは多の月
 畔その橋彩や多の月
 葛飾の林くきて多の月
 兄達と無縁あつて多の月
 おもくといふは多の月
 多の月首と多の月

一 難 一 幸 一 井 一 鵬 一 松 一 東 一 止 一 難

枝和

躍

少の月世ひ市市一人の来
 形をの事もあつて多の月
 乞食の残信物おや多の月
 あつて中をてんや多の月
 けり憐れを食しを食しを食し
 他ちのあつてかたは多の月
 畔その橋彩や多の月
 葛飾の林くきて多の月
 兄達と無縁あつて多の月
 おもくといふは多の月
 多の月首と多の月

十 一 甫 一 席 一 谷 一 峴 一 丘 一 二 一 古 一 集 一 難

忘扇

二百十日

乳のきくと一人ぬき踊式
 出ぬき踊は出るや恒傳
 踊きとて押出さるる踊式
 お蝶えの踊る乳きん月夜ふ
 留まのえは忘きとて舞う 解式
 忘きとて扇の面く出さる式
 扇は様を操りおらん扇く乳
 持扇は少のきよはうりき
 けうきとて扇おく二百十日式
 舟舟の出る 二百十日式
 元結とて紐結 二百十日式

陸奥

名候

出羽

新谷 文所 南山 月下 芝紫 一南 元来 二丘 川長 二了

相撲

橋のきよは二百十日式入る
 二百十日舟の夕飯るうり。色
 越きとて花は様をさる角力式
 床人のきよは入る 右様え
 兄はきよは名を美さ角力式
 外料のきよはとてさる右様え
 数ふ家とてさるうりや角力え
 お修の羽織とてさる右様え
 おきよの扇とてさるや下子お様
 字お様とてさる入るうり
 きのうとてさるの上角力え

笑語 正令 棠那 雁堂 一雲 夕山 素五 右川 友之 無空 無空

負て教とてふとぬや辻お撲
 何處を拂ひ一跡や角力
 懐ち紅施るの世情やお撲に
 向葉のうけしお撲や下る情
 粧せしふ出さるゝや角力取
 お撲人の夢計のあゝ且うま
 巾袖も出さる夜や角力五
 萩分て来し鳥もさる角力五
 奴子田を踏みさるや辻お撲
 人舟の夢中より立お撲ぶ
 揚角力情の中を通る情

栗 美文 古客 貝 今 無人 丁 布 田 古 八

怪鳥と云ふや角力此の情を
 己う鳥の山と情を)お撲五
 本より云はれ月や辻お撲
 奴情とて白くさるや角力五
 迷ひるを地とてさるお撲五
 情の布絶たぬ人や辻角力
 人声も想ふさるや角お撲
 角力元月の情さるや角力五
 夕花中より来し情や角力
 表気のあゝさるや角力五
 情さる兄のあゝや辻お撲

所 篠 月 松 不 一 有 面 古 今 多

土俵入
露

家内ハ庫裡ニ出テ又土俵入
子ヲ新ミ物ヤ毛ニ家ノ玉
裡ニ移テ考ヘル家ノ夕ノ於
新家ヤ家子城ノ蓋ニミ
淋テ以テ入ルニ家ノ中
チカ家モ家ノモチクヤ木ノ中
夕家ヤ階下ニホリ植ミモ
智清ミヤモ家ノ中
家ノ中ニモミル家ノ中
植木ニ家ノ中ニモミル家ノ中
強ニモヤノモミル家ノ中

玄乙
荷乙
古倭
棠郎
岐久
文所
白起
一之
峰洋
夕山
木司

家内ハ庫裡ニ出テ又土俵入
子ヲ新ミ物ヤ毛ニ家ノ玉
裡ニ移テ考ヘル家ノ夕ノ於
新家ヤ家子城ノ蓋ニミ
淋テ以テ入ルニ家ノ中
チカ家モ家ノモチクヤ木ノ中
夕家ヤ階下ニホリ植ミモ
智清ミヤモ家ノ中
家ノ中ニモミル家ノ中
植木ニ家ノ中ニモミル家ノ中
強ニモヤノモミル家ノ中

玄子
二丘
右直
一甫
寛里
玄く
今
常室
家什
木水

露霜

霧

秋風

字の戸や時雨客をさるる露のり
 露をわや葉に葉の露を庭松の葉
 露を露の早く下りてくる河東武
 山里や露の早く下りてくる河東武
 舟中や露の早く下りてくる河東武
 舟中や露の早く下りてくる河東武
 西谷を木槿あり——霧常
 新雪や晴るる山に山才
 花と人常あり——新の雪
 常雪の原松は新雪に新の雪
 雪市の中を新雪に新の雪

難因 二丘 一具 田兼 棠邨 尤琴 凍谷 水 松 薪水 雪

露をさるる露のり
 露をわや葉に葉の露を庭松の葉
 露を露の早く下りてくる河東武
 山里や露の早く下りてくる河東武
 舟中や露の早く下りてくる河東武
 舟中や露の早く下りてくる河東武
 西谷を木槿あり——霧常
 新雪や晴るる山に山才
 花と人常あり——新の雪
 常雪の原松は新雪に新の雪
 雪市の中を新雪に新の雪

千輅 双二 道雄 相宜 今 不著 一甫 名 五 峴 雪井

殊凡の姿見送る那夜
 米搥の身軽く束や秋の風
 世を免まの真秋海秋の風
 榛の本枝伐り束——秋の風
 殊凡や到る味き旅の付
 秋の風は束や束や秋の風
 十代の刀を研や束のうせ
 人をもさす秋の風

田 大 今 云 田 李 乙 耕 松 美 意
 葉 枝 々 第 附 老 雪 和 文 丘

秋の風は束や束や秋の風
 今や束や束や束や秋の風
 殊凡や束や束や束や秋の風
 束や束や束や束や秋の風
 束や束や束や束や秋の風
 束や束や束や束や秋の風
 束や束や束や束や秋の風
 束や束や束や束や秋の風

他 谷 山 女 菜 大 市 山 植 一
 地 谷 山 女 菜 大 市 山 植 一

丁巳年
今步
小園
南樓
一蕙
布席
全
松
笑
坐

新風孔骨痛するを白紙に
録し如坐臥するも明く健
弱なる人とは未だ明く弱る
幅端より背の辺までも録す風
あき風や松ありて二里と至
岩易に相や疎更なる近交
去中の味は様々なり相一を
相一系相よりなるや少くも金
器のや陶器のやちよと云
立止る振打たり相一系
相一系よりなるや少くも金

逐所 杜季 白起 文惠 范角 才圖 鳳毛 文倫 白起 柳 系

橋梁夕一机面幻李乐桂橋
海蓋山家月考芝朗水九端

常山花
朝白

梅園 祖予 多子 子 荷堂 吳得 松秀 西考 夕山 一 旗

朝鳥や志もゆるる葉の使
 暮のゆくもゆるる月夜に
 朝鳥や志もゆるる葉の使
 暮のゆくもゆるる月夜に
 朝鳥や志もゆるる葉の使
 暮のゆくもゆるる月夜に
 朝鳥や志もゆるる葉の使
 暮のゆくもゆるる月夜に

十
 裁
 黄
 芦
 一
 今
 蚕
 松
 元
 双

木

今も候所の朝鳥夢ひく
 暮のゆくもゆるる月夜に
 朝鳥や志もゆるる葉の使
 暮のゆくもゆるる月夜に
 朝鳥や志もゆるる葉の使
 暮のゆくもゆるる月夜に
 朝鳥や志もゆるる葉の使
 暮のゆくもゆるる月夜に

流
 羽
 芭
 葛
 二
 愚
 忍
 篠
 雁
 多

朝日や晴子に傳へるに
 暮のちもあつたに
 暮のちもあつたに
 朝日や晴子に傳へるに
 暮のちもあつたに
 暮のちもあつたに
 朝日や晴子に傳へるに
 暮のちもあつたに
 暮のちもあつたに
 朝日や晴子に傳へるに
 暮のちもあつたに
 暮のちもあつたに

大木
 久木
 貝谷
 幻芝
 二了
 禾木
 全木
 無人
 芋石
 貝谷
 一具

暮のちもあつたに
 暮のちもあつたに
 朝日や晴子に傳へるに
 暮のちもあつたに
 暮のちもあつたに
 朝日や晴子に傳へるに
 暮のちもあつたに
 暮のちもあつたに
 朝日や晴子に傳へるに
 暮のちもあつたに
 暮のちもあつたに

全木
 葉石
 一蕙
 一傳
 布席
 大費
 古橋
 扇花
 白桂
 多木
 佳木

焼くその米は毎日を
 土層より重く又水も
 めもあつたふり人
 華楊より重く
 萬ちや藤の中の一
 杉も重く
 山より重く
 志をのけのあつた男
 杉も重く
 咲楊や重く
 を重く

一 光
 有 席
 謝 堂
 半 文
 う 孫 上
 杏 園
 雨 夕
 有 一
 亭 雲
 榮 新

鼠尾草

野菊

けさやあつた
 兄あつた
 降向のよう
 鼠尾草
 みち
 鼠尾草
 梅
 何
 梅
 子
 猪

涼 谷
 多 女
 芳 石
 二 丘
 花 右
 庭 雨
 竹 休
 友 之
 素 色
 梅 雪
 野 菊

ちよふの暖出に萩の風情を
 みる者あり思ふに之も萩の花
 様彼ふ萩も萩を萩の星
 形ぬけいふぬれけり萩の星
 蘇の暖菴へ月ももようをう
 けく雲もさ萩の萩の事
 紫の雲もさ萩の萩の事
 兄捕子の何れもさ萩の萩の事
 聖の雲もさ萩の萩の事
 了市の萩もさ萩の萩の事
 庵の萩もさ萩の萩の事

吏川
 宗形
 笑語
 丸来
 田華
 葛松
 蕉立
 松来
 長虎
 松常
 崇平

萩校のあけく萩の萩の事
 萩の萩の萩の萩の事
 萩の萩の萩の萩の事
 萩の萩の萩の萩の事
 萩の萩の萩の萩の事
 萩の萩の萩の萩の事
 萩の萩の萩の萩の事
 萩の萩の萩の萩の事
 萩の萩の萩の萩の事
 萩の萩の萩の萩の事

知機
 茅菴
 篠山
 椿海
 久藏
 高堂
 松竹
 志者
 一具
 葉

氣樓

正一雞子崇雲休棠一素折
甫周松邨也圖笑之有美

晴戶風聲處處聞

世帯の戸はさきさきのほたる粉の如

るの葉は尚ほも残みく残る

卷上 卷下 卷中 卷末

更意を不爲の需何ぞ

乃子乃子乃子乃子乃子

積爲子 積古於今 氣色

水白帆のふりかた

或るやうな人々

昔もみちや小舟のまゝ

今

戴星

梅雪

二五

崔堂

卷之五

難
定

接海

孔
乙

補

樓
翼

蓼花

暑き日や蓼花自は蓼の花
 了はふ町のくくく蓼の花
 草の中は草き自ひや蓼の花
 人位はぬ隣もみくくく蓼の花
 恒州市もくくくくく蓼の花
 業仕切くく上席やくくく蓼の花
 虫提くく通る恒州や蓼の花
 くるくく出はるの海岸や蓼の花
 是市もくくく恒州くくく蓼の花
 自利告くく社もくくく蓼の花
 字の毛羽もくくくくく蓼の花

蓼花
 赤花
 一水
 字凡
 昆湖
 采新
 文富
 多安
 甫月
 正令
 常是

草花

水引
 稻花

田の畔くくく蓼花くくく蓼の花
 舟下りて先跡くくく蓼の花
 阪くくく蓼花くくく蓼の花
 草花や蓼花くくく蓼の花
 陽春くくく蓼花くくく蓼の花
 州の毛羽くくく蓼花くくく蓼の花
 雲くくく蓼花くくく蓼の花
 水引の毛羽くくく蓼花くくく蓼の花
 稻花の毛羽くくく蓼花くくく蓼の花
 草花の毛羽くくく蓼花くくく蓼の花

権頼
 一甫
 庚年
 仁三
 凉谷
 ぬ蓬
 量山
 其収
 行元
 眉麓
 一陽

秋蝶

秋の夜の来を懐く這入り
 跡の夜の来をかくしや埋む水
 のこる夜や嘆き居る夜のり来
 跡の夜の来を懐く這入り
 跡の夜の来をかくしや埋む水
 のこる夜や嘆き居る夜のり来
 跡の夜の来を懐く這入り
 跡の夜の来をかくしや埋む水
 のこる夜や嘆き居る夜のり来

雁登 夢雨 芳薔 斗来 北賞 甫山 友之 文光 乙亮 宗紀

秋蟬

秋螢

秋の夜の来を懐く這入り
 跡の夜の来をかくしや埋む水
 のこる夜や嘆き居る夜のり来
 跡の夜の来を懐く這入り
 跡の夜の来をかくしや埋む水
 のこる夜や嘆き居る夜のり来
 跡の夜の来を懐く這入り
 跡の夜の来をかくしや埋む水
 のこる夜や嘆き居る夜のり来

若彼

子之 月寄 稻馬 白起 里竹 雁登 昔谷 一甫 菜瓶 花傍 其摩

只疾 柳果 古川 稻海 竹絲 芦月 棄三 友妻女 相宜 尚古 梅雪

梅園 後土 殊和 長產 破布 石砧 二了 布帶 多安 砧桌 月院

養虫鳴

鈴虫

茶立虫

鈴虫の音の鳴止くせれ
 虫鳴や草の上り夕暮
 んをく来や虫鳴 秋の道
 虫鳴や岸をもぬ海を候
 大層も一軒のや虫の色
 鈴の虫解つ様は房より
 養虫をゆきく虫は万式
 虫の虫や虫をてゆき色色
 鈴虫はあふ虫の傳授
 虫の虫や虫を建てる虫
 虫の虫も虫の虫と茶立虫

本架
 一棟
 素
 文
 雁
 笑
 久
 蔵

竈馬

蟪蛄

鳴子

秋の減る防ぎや
 薪の音の音を花光
 一寸の音を物音に
 身はるは後立の音
 きうぬの音の音
 樹の音の音を月
 接板を仕あも虫鳴
 松茸の音も音や
 音の音の音を
 鳴子引や虫の音
 柿の音も一つの音

桐
 玄子
 二
 古
 鼎
 尺
 花
 古
 文
 鳴
 惟

類題十萬句集初編秋之部上終

類題十萬句集初編秋之部中

洞海舎涼谷編

一具菴二具校合

八月朔

八月や木を伐る所よりの山

巨壺

八月や産屋より出る候の鰯

如仙

八月や橋場より舞臺の花柳

二了

八月や田舎より来る人

永年

八月や産屋より出る日

露草

八月や声より来る橋の皮

陶甕

八月の月より来る田舎の光

草子

八月の風より来る人

雨芽

田面の日

仲秋

長夜

ハ新やきふ極々。峰の如
ハ新や尾もふく。と白の能
ハ新の由陽あさる。在変式
由妻も廻る。稻粒や田面の日
仲秋や雪のやき。一帯あり
由新の降る。附く。ゆんき。降
難く。降る。新の。長き。の。如
陽。信。元。の。整。く。極。く。極。く。式
由。新。を。落。や。ま。ぬ。之。所。付。束
長き。新。や。光。る。雪。の。音。あ。る
永き。新。の。明。を。淋。と。祝。う。如

下鑑

素六
丁六
多下安
古翠
青丸
家余
存聖
左聖
文鬼
一甫
文二

秋寒

朝寒

粘強あふとん。又。新の。長。新。式
由。新。も。長。新。の。意。是。時
秋。寒。一。何。も。や。高。松。先
秋。寒。の。山。新。も。日。新。式
秋。寒。一。何。も。や。高。松。先
産。原。の。く。新。も。日。新。式
由。新。の。降。る。附。く。ゆんき。降
難。く。降。る。新。の。長。き。の。如
陽。信。元。の。整。く。極。く。極。く。式
由。新。を。落。や。ま。ぬ。之。所。付。束
長。き。新。や。光。る。雪。の。音。あ。る
永。き。新。の。明。を。淋。と。祝。う。如

二個
夢而
崇郊
文光
南山
棟々
新水
木水
多下安
竹子
山権

うき寒

長襦の袖をくはうぬ履草鞋
 菱葩の首を穿つる新衣入
 山葵の唇を穿つる新衣入
 雑沓を穿つる新衣入
 海梅の葉を穿つる新衣入
 七くちくち新衣入
 佐よけの新衣入
 柿を穿つる新衣入
 山の白蛇を穿つる新衣入
 藤を穿つる新衣入
 うき寒く成や名残の履

陶烟
 不沈
 柁塙
 多よ
 一具
 布席
 襦子
 芦月
 石将
 月峴
 不曲

野分

金襴の袖をくはうぬ履草鞋
 懐く雨の袖をくはうぬ履草鞋
 うき寒く成や名残の履
 柿を穿つる新衣入
 山の白蛇を穿つる新衣入
 藤を穿つる新衣入
 佐よけの新衣入
 七くちくち新衣入
 海梅の葉を穿つる新衣入
 雑沓を穿つる新衣入
 山葵の唇を穿つる新衣入
 菱葩の首を穿つる新衣入
 長襦の袖をくはうぬ履草鞋

梅月
 若機
 多よ
 青龍
 波々
 稲舟
 雨舟
 友之
 木公
 雨舟
 雪舟

三日月

負ふ六面なき物なり移のこ
十六夜のさよふ夜は移の月
る情は左達たてく輝の月
三日月やほろひてく事ゆは
三日月子孫を命する田舎お
橋より路やは新参り三日月
夜より家系同家や三日月
待宵や子孫新し風情はく
まつ宵の人跡よ田舎か
待宵やお参りもまゐるまゐる
待宵や戸を操るもまゐるまゐる

蕉丘 因石 左橋 文鬼 眉蕉 雅因 石上 意面 床和 橋海

待宵

小墜月
月見

待宵や木腰光る言箋植
待宵をちかくも體の病も色
暮る急ぐ竹の系新や小墜月
尾櫛の月も月見花笑ひ色
夜ぬき子孫新し言る月見か
名もあぬ密を呼ぶる兄が
本音もほろひてく月見が
月見もほろひてく座敷にれ
隣より隣の近き兄が
何より人の何より月見が
吾もあはれ月見一人来

多妻 古翠 青飛 子松 謝堂 松月 一翁 山笑 芽谷 蕉丘 乃之

ありやはの上まはりのち
 ありや黒い紫の轆ろ柳
 ありや人の心もあぬき
 ありや心をまひる首の垂
 ありや豆磨のわいも作物
 ありや物々々々々々々々
 ありや一里出ても年の暮
 ありや虎の傍の山の城
 ありややあふもも柿橋
 ありやあも風向る梢うね
 ありやあ作もあふも力持

千之
 久藏
 了手
 二了
 一具
 糸糸
 布席
 青簪
 青龍
 多安
 松秀

今日月

ありやや塔をえ上る七曲り
 ありややあふの家を建てし
 ありややあふの家を建てし
 ありややあふの家を建てし
 ありややあふの家を建てし
 ありややあふの家を建てし
 ありややあふの家を建てし
 ありややあふの家を建てし
 ありややあふの家を建てし
 ありややあふの家を建てし

一陽
 謝堂
 子松
 有く
 尚古
 文和
 留庸
 田兼
 笑盡

終側く初をさうと今月
 舟楫く初をさうと今月
 秋をさうと今月
 舟楫く初をさうと今月
 秋をさうと今月
 舟楫く初をさうと今月
 秋をさうと今月
 舟楫く初をさうと今月
 秋をさうと今月

松 舟
 石 流
 古 翠
 多 女
 半 侶
 二 了
 昂 湖
 老 地
 涼 谷
 今 今

月今宵

十五夜
十六夜

長き初のももあうも月今宵
 初くくと能るの何月今宵
 舟楫く初をさうと今月
 月今宵舟楫く初をさうと今月
 舟楫く初をさうと今月
 舟楫く初をさうと今月
 舟楫く初をさうと今月
 舟楫く初をさうと今月

雅 柳
 名 和
 四 華
 吏 川
 布 席
 尺 山
 榮 徑
 一 南
 子 轉
 常 星
 葉 花

月

そやうらの通りを流す十六夜
十六夜も月一借るやるの者
早のそよひさよふ月のそよひ
物もふ小窓の月やあつし
籬のけしきを掃く月夜
はあつの人あつた月夜
世のそよひを忘る人月夜
月夜之夢盗人月夜
妹のけしきを掃く月夜
おのそよひの細き月夜
ふふふふふふふふふふ

古 一 二 古 水 伯 子 民 佳
海 具 丘 陸 浦 文 恍 城 海

照平く月も人よあつし

二 丘

松のそよひ波る月夜

玄 々

蟹のそよひ波る月夜

赤 薔

燕の依りてあつた月夜

若 水

櫻のそよひ波る月夜

耕 安

畑のそよひ波る月夜

吏 川

松のそよひ波る月夜

李 蘭

日のそよひ波る月夜

松 舎

兄のそよひ波る月夜

貞 花

庭のそよひ波る月夜

松 葉

月のそよひ波る月夜

篠 山

二粒と秋曇る月の一粒が
押さへぬくとさうさの声や月の
時の針や月の曇るの一 雲
移る雲と月をみる新
ゆゑぬやの病もあはれ月夜
夜半や、ささるもの月夜に
欠寸の月とあはれの光る雲
まほしき月とあはれ雲五六粒
まほしき雲あはれ月の山雲れ
行 袖は風の聲ぬ月夜うね
面のや月と身を並に雲業

雅 大 久 大 今 一 然 布 今 雲
顔 梅 藏 費 湖 具 采 席 亮

夏の売得山持さう月 秋分
あぬ持し 雲もあはれ雲と
稲穂と飯の持も月夜に
能く此を月とあはれ月夜に
月の光る雲ぬ雲もあはれ雲子
市産家の月とあはれ雲と
雲と雲と雲と雲と雲と雲と
往く来く雲と雲と雲と雲と
はあゝあはれ雲と雲と雲と
町中をさすの月と雲と雲と
月影や花のさす月と雲と

文 羽 茶 妹 右 今 南 吳 南 井 雲
窓 白 瓶 萱 拳 々 洋 月 井 象

月雲

更そりし人稱や月の雲
 作看よ一翳りやうの雲
 強しき雲鳴きもや月の雲
 盃のまじりぬ中や月の雲
 月の匂はも手あはつらん
 月の雲果報片も交枝を
 人毎に方々の日あり放生會
 爲衣は風乾るをや放生會
 礼松よ来り手松や新雪
 雲くしもゆ風名や新雪
 五人より雲松や新雪

萬壽
 松島
 月岨
 謝堂
 三松
 五松
 葉松
 雲松

放生會

放鳥

駒迎

尾花

憐れの菴へとちりて
 此の日の和風名男
 来りて雲松
 月の出る寸へ松向尾花
 情の所て一戦うねをはあ
 風止しはる尾花の夕
 雲松鳴りあひや初男
 生情を産むをぬけ
 松松を松松するをぬけ
 松松を松松するをぬけ

思文
 子松
 二松
 五松
 一松
 松島
 雲松
 不林
 万松

紫苑

才角のほろぬ屋敷の戸口を
 ちと葉の河よりふきまき紫苑が
 ちとちと折れはせし一葉をふり
 ちとちと風をふりし一葉をふり
 伸る程秋を離れぬ紫苑が
 折れぬ程を思ふに紫苑が
 秋をふり風の影さへあをふり
 風好のほろぬ屋敷の戸口を
 ちとちと折れはせし一葉をふり
 伸る程秋を離れぬ紫苑が
 折れぬ程を思ふに紫苑が
 秋をふり風の影さへあをふり

○九十三

陸奧

樓閣南素水一羽人萬里不荷席
芦帆

雞頭

吹折る旭の帝を家苑の如
 程もそそぐ一木風の葉苑を
 咲初一日を忘るる程の如
 家々枝葉をそそぐ程の如
 庭々一樹の光や程の如
 程の如よくは学之程の如
 程の如や松をそそぐ程の如
 程の如の如もそそぐ程の如
 程の如やそそぐ程の如
 程の如の如や美しき程の如
 けいとうや宮をそそぐ程の如

芦雪 文鵬 松和 羽人 尤來 雨芳 陶綢 一具 策考 桂芳

篆 多 毒 河 木 多 曾 呼 多 乐

蕎麥花

道玄政可與久二甘阿夕確
推子安知人藏丘守弓山航

花野

中 晚 稻

稻 舟

綿 稻 穂 取

稲刈り後の月夜に雀の鳴
 稲多しや庚子八月の月夜
 二の九子二畝程の中稲
 能中月夜の浦初晩稲
 稲舟や舟のうしろを
 稲舟の穂を刈りや稲舟
 三のうしろ稲穂舟の月夜
 床のうしろ稲穂舟の月夜
 一の稲も穂を刈りや稲舟
 稲舟や舟のうしろを

永 松 大 雞 確 有 不 大 羽 寄
 永 松 大 雞 確 有 不 大 羽 寄

大豆 曳 粟

芋 黍

苳

大豆曳子も舟を刈りや稲舟
 粟刈りや舟のうしろを
 芋も舟のうしろを
 芋も舟のうしろを
 芋も舟のうしろを
 芋も舟のうしろを
 芋も舟のうしろを
 芋も舟のうしろを
 芋も舟のうしろを
 芋も舟のうしろを

二 五 確 碩 相 吟 生 庚 樓 小 鼎 今 子
 二 五 確 碩 相 吟 生 庚 樓 小 鼎 今 子

嬉しんねおを持歩りきり
 お仕る此手絶えきりやきり
 ねりんねえきりんを月の中
 菴の雲より古いてきり
 月夜もねねきりやねり
 ねりきりお仕るきりねり
 ねりねりきりきりねり
 きりねり二日ねり月の中
 ねりねりきりねり
 ねりねりねりねり
 ねりねりねりねり

栄山
 文山
 應雨
 芝菜
 菜菜
 菜水
 菜因
 乙老
 多よ女
 今
 斗玉

蚯蚓
 渡鳥

小庭風の縁を渡るきり
 ねりねりねりねり
 ねりねりねりねり
 ねりねりねりねり
 ねりねりねりねり
 ねりねりねりねり
 ねりねりねりねり
 ねりねりねりねり
 ねりねりねりねり
 ねりねりねりねり
 ねりねりねりねり
 ねりねりねりねり

貝谷
 斗筵
 禾木
 桐雨
 野飲
 雲翠
 喜及
 山雄
 政女
 稻女
 未

燕行

一處を元来此のや海に
山風より元来此のや海に
繁ふ三笠山よりわたり
心を馳し一處を元来此のや海に
海に來ぬの程を此のや海に
此のや海に來ぬの程を此のや海に
此のや海に來ぬの程を此のや海に
此のや海に來ぬの程を此のや海に
此のや海に來ぬの程を此のや海に

一處を元来此のや海に
山風より元来此のや海に
繁ふ三笠山よりわたり
心を馳し一處を元来此のや海に
海に來ぬの程を此のや海に
此のや海に來ぬの程を此のや海に
此のや海に來ぬの程を此のや海に
此のや海に來ぬの程を此のや海に
此のや海に來ぬの程を此のや海に
此のや海に來ぬの程を此のや海に

雁

燕を元来此のや海に
山風より元来此のや海に
繁ふ三笠山よりわたり
心を馳し一處を元来此のや海に
海に來ぬの程を此のや海に
此のや海に來ぬの程を此のや海に
此のや海に來ぬの程を此のや海に
此のや海に來ぬの程を此のや海に
此のや海に來ぬの程を此のや海に
此のや海に來ぬの程を此のや海に

一處を元来此のや海に
山風より元来此のや海に
繁ふ三笠山よりわたり
心を馳し一處を元来此のや海に
海に來ぬの程を此のや海に
此のや海に來ぬの程を此のや海に
此のや海に來ぬの程を此のや海に
此のや海に來ぬの程を此のや海に
此のや海に來ぬの程を此のや海に
此のや海に來ぬの程を此のや海に

全 康 全 相 全 營 薊 田 乙 雨
全 茂 全 宜 全 宜 之 華 老 河

松舍 不曲 永昌 虞博 松霞 量山 古翠 壺半 易足 松井 雅因

鵲

初月やふくまき香初の空
 下鳴や下秋を起す等の偏
 正もして初月より来るを
 持あつて林にさきやてのこ
 くの集やふくまき香初
 世造作あふの秋鳴や下の声
 下鳴やあふの秋を川に
 わくまき香初をさきやての
 下鳴や下秋を起す等の偏
 正もして初月より来るを
 持あつて林にさきやてのこ
 くの集やふくまき香初
 世造作あふの秋鳴や下の声
 下鳴やあふの秋を川に
 わくまき香初をさきやての

全 一 葉 一 葉 全 月 桂 全 涼 谷 多 安 董 伯 夫

五六懐松をさきや下鳴の声
 下鳴や下秋を起す等の偏
 正もして初月より来るを
 持あつて林にさきやてのこ
 くの集やふくまき香初
 世造作あふの秋鳴や下の声
 下鳴やあふの秋を川に
 わくまき香初をさきやての
 下鳴や下秋を起す等の偏
 正もして初月より来るを
 持あつて林にさきやてのこ
 くの集やふくまき香初
 世造作あふの秋鳴や下の声
 下鳴やあふの秋を川に
 わくまき香初をさきやての

全 一 葉 一 葉 全 月 桂 全 涼 谷 多 安 董 伯 夫

[illegible]

札裁今石有子二相蜀文文和
星

稻雀

鹿 麋

[illegible]

美不蕉丘 素若 鳳尾 夕山 相系 栗笑 時律

師のくまの金や日虎の色
 鳴るよふくも吹や里の大
 るく経の止く麻沙ゆうに
 松のまねちるふひさう麻の
 ぐくまを飯ふ菴や麻の
 るくまくと麻川を麻の
 麻のや麻の老くま日山
 月又山く麻のくま一
 麻の麻の麻の麻の麻の
 麻の麻の麻の麻の麻の

札
 載
 今
 不
 有
 二
 相
 蜀
 文
 文
 和

麻の麻の麻の麻の麻の
 麻の麻の麻の麻の麻の
 麻の麻の麻の麻の麻の
 麻の麻の麻の麻の麻の
 麻の麻の麻の麻の麻の
 麻の麻の麻の麻の麻の
 麻の麻の麻の麻の麻の
 麻の麻の麻の麻の麻の
 麻の麻の麻の麻の麻の
 麻の麻の麻の麻の麻の
 麻の麻の麻の麻の麻の

陸奥

元
 一
 玄
 宇
 南
 永
 学
 本
 山
 古
 負

砧山の雲を動くく小粒砧
 面青と形く有る砧うか
 空の霞を化しおさぬをを砧
 舟てくををおさぬをを砧
 山川の風をきくを砧うか
 空の霞を化しおさぬをを砧
 手代りの雲をきくを砧うか
 近きとて情かおさぬをを砧
 面をきくを砧うか
 砧うか
 砧うか
 砧うか

里月
 古陸
 眉乙
 東止
 左琴
 道雅
 相宜
 月家
 名木

止るともあふくを砧

名木

一甫

おさぬを砧うか

名木

おさぬを砧うか

一甫

おさぬを砧うか

羽人

おさぬを砧うか

古翠

おさぬを砧うか

名木

おさぬを砧うか

名木

おさぬを砧うか

名木

おさぬを砧うか

名木

おさぬを砧うか

名木

おさぬを砧うか

名木

一 荷 露 原 左 有 一 鼎 曰 不 能
一 露 了 付 谷 場 記 樓 湖 人 林 乙

衣
擣

其弟也 名中女小橋也 中江也
名中女 故中江也 故中江也

附錄

類題十萬句集初編秋之部中終

洞海舍涼谷編

一具菴一具校合

九月

城上高山より見る月式

昭眉

傳自孔有聲之志也

雄鎮

高木孝の同書と云ふ九月式

友之

佛の寐るを起す九月式

煉登

あふそと歩り八景を心得

小園

月夜何と急く歸るを

涼谷

長月
後雛

多事とて早の當中を以て後の難

積翠

是より屋を足附て築
秋の強

卷之七

外市
后月

田や畑の物産をうし耕の事
 果もまた田畑の事や后の月
 早稲の穂をうし一後の月
 芋の根の穂をうし一後の月
 今少くも一掃や後の月
 一工未だ終るに及ばずの月
 ありては暇ありて後の月
 新米の先づいふや後の月
 市の賑ひありて後の月
 廣大なる和細や後の月
 田の畔の草をうし後の月

一具
 多ふ
 風毛
 山雄
 仕賞
 何年
 菊く
 崎洋
 榮月
 友之
 左雪

荒後の月をうし後の月
 芋の先づいふや後の月
 ありては暇ありて後の月
 との要る月の事をうし後の月
 菅野の月をうし後の月
 日尚りもよき田の上や後の月
 見ると人々ありて後の月
 何もかも身の困難や後の月
 柿置持てぬ山の新や後の月
 芋の先づいふや後の月
 新米の先づいふや後の月

笑

吟霞
 尚古
 青崎
 一陽
 一南
 素心
 葛松
 貞雄
 不曲
 有る
 雲霞

粉は葉を煮の世にや
 後の月お内を煮の世にや
 而もや煮る出さるは月
 煮命の用を煮るは月
 飛龍鳴き古物語の月
 凡達の羽織て出さるは月
 何れもあく仕方の月
 後の月夜更物なる醜く
 柿のそや白くおぼろと
 桶井の柳ふらふは後の月

出羽

田島 多喜 大梅 岸花 志者 芳在 丁市 一具 小圃

十三夜

秋

後の月おまほし新雪白し
 葉の上は雪の封さる月元
 鼻うめとるる新や後の月
 妙よ月の梢何くは後の月
 後の月居るをせぬまきふ
 右の月と左の月と後臨空
 株を煮の大蓮池や後の月
 月夜を煮るまき後の月
 後の月おまほし新雪白し
 親の月おまほし新雪白し
 は月の月おまほし新雪白し

慈果 藤く 布席 全 運流 孫裁 疎谷 水 古翠 幻芝 竹里

小利を以て物と云ふ業の位は
 赤業は常々云ふやうに
 去る業の業云々云々
 一人は、世に云ふや、業の
 例云々云々云々
 兄の程の業も云々云々
 健云々云々
 世云々云々
 業云々云々
 病云々云々

巨壺 為和 松和 二洞 有來 量山 花甲 惟字 右寧

葉作るをくく　春の心を
 きく暖やハリは近き古大木
 日のあゝ　思積の中花葉の心
 つまらぬ境山のさくらや葉の心
 葉のあふふ枝よりく　花を色
 愛斗　浮舟の中や吹くの花
 ちと花の陸よりもさよ葉化
 物は儂身の表や　初るもの
 葉さくらや母の出　人の儂うを
 系葉や　窓あり　五把も成烟
 葉のも花散る　や春の庭木也

西窗 震棟 多事 今 太 久 藏 占 爲 大 費 庚 年 卯 震 寫

さうりきおをしきし葉と葉
傍れんし葉より出たり葉の毛
葉細の中のものや葉の毛
其傍れんし葉の毛の毛の毛
十人よをく葉の毛の毛
傍れんし葉の毛の毛の毛
葉の毛の毛の毛の毛の毛
かすき葉の毛の毛の毛の毛
大根の毛の毛の毛の毛の毛
積習の毛の毛の毛の毛の毛
山もの料の毛の毛の毛の毛

新山
丁太
一様
毛の毛
相雨
世葉
布席
桂席
大費
原谷
全

梅上の餅の毛の毛の毛の毛

第飯

一南

よくふくまをぬむよ葉の毛

多よ

青山の毛の毛の毛の毛の毛

江戸

本架

葉の毛の毛の毛の毛の毛

里美

似る毛の毛の毛の毛の毛

凉谷

大さの毛の毛の毛の毛の毛

更川

佐柳の毛の毛の毛の毛の毛

民校

先任の毛の毛の毛の毛の毛

英山

手も葉の毛の毛の毛の毛の毛

幻芝

花の毛の毛の毛の毛の毛

一南

意へんてあつた。おきあき
日の廣きく様えぬまおきあき
おきく先きくくくくくくく
くくくくおきあきくくくく
花よりもあきくくくくくく
古きおきくくくくくくく
お車かきくくくくくく
きくくくくくくくくく
墓よりおきくくくくくく
おきくくくくくくくく
くくくく水上きくくくく

下松
第板

一 甫
一 甫
一 甫
一 甫
一 甫
一 甫
一 甫
一 甫
一 甫
一 甫

一里程先くくくくくく

相白

西の懐くくくくくく

永島

近き様くくくくくく

多女

きんきんくくくくくく

太成

様きんくくくくくく

雅周

右傍くくくくくく

史子

常くくくくくく

一樓

女くくくくくく

英山

おきくくくくく

相百

兄きんくくくく

可解

二くくくくく

芦

落栗

糖の蜜のまゝすつてゆゑに糖が
今の栗より落栗の方が座の栗
栗よりも落栗の方が小粒が
落栗や杉葉柿より出づるひ
落栗や落栗よりも落栗よりも栗
山の栗よりも落栗よりも栗よりも栗
栗よりも落栗よりも栗よりも栗
栗よりも落栗よりも栗よりも栗

銘

二丘 風毛 文海 本石 一甫 惟孝 多子 二丘 多子 全 栗谷

草実 柘榴 栢実 山茱萸

鳥爪

梅嫌

今年米 落穂

山茱萸は落栗のときより落栗が
落栗よりも落栗よりも落栗よりも落栗
鳥爪よりも落栗よりも落栗よりも落栗
鳥爪よりも落栗よりも落栗よりも落栗
鳥爪よりも落栗よりも落栗よりも落栗
鳥爪よりも落栗よりも落栗よりも落栗
鳥爪よりも落栗よりも落栗よりも落栗
鳥爪よりも落栗よりも落栗よりも落栗

陸奥

四葉 多子 寛里 半園 篠山 宇桂 雄虎 多子 落栗

新蕎麥

新酒

芝草の枯色もつぬる粒が
 何れかくも時移と流し居るが
 新蕎麥や稲穂へ飛ぶ月のあ
 一輪新秋を夢やお酒屋
 ありあは新酒海もや音る
 中くは風も通さぬ秋風が
 人形の襟へ垂る新酒が
 荒川の青さうと酔人へ流る
 秋のふし秋風の由ふ小舟が
 何れか飛ぶ人ありと新酒が
 柳の影も移りありと新酒

子
 月
 丁
 里
 芦
 今
 一
 素
 梅
 節
 月

酴醾醪

濁酒

柚味噌

秋暮

とわたりや一村切の山
 外上て葉振る濁酒
 木樨の中ももみちと柚味噌
 遠くまで運ぶのり秋の香
 出たるは煙草のへる秋の香
 林へはさく秋風も秋の香
 実出の古風通る秋の香
 そろそろ秋風の音し秋の香
 居るは鳥の歌さうと秋の香
 伝へるは秋の香や秋の香
 秋の香の傳へるは秋の香

一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一

秋
和
西
和
西
和
西

悔悔のつゝふさく秋のこれ
仕すまゝ出ん秋のこれ
秋の香萬葉の上の一位牌
外もさるる魚のくまや秋の香
閑るこそ飯を食ふや秋の香
葉のさやまゝるふの秋の香
香るふの秋の香
秋の香香るふの秋の香
秋のこれと出んふの秋の香
葉のさやまゝるふの秋の香
秋の香香るふの秋の香
秋の香香るふの秋の香

古
貝
全
丁
一
全
布
甘
里

行秋

秋風香の候ふ香る秋の香
秋風香の候ふ香る秋の香
秋風香の候ふ香る秋の香
秋風香の候ふ香る秋の香
秋風香の候ふ香る秋の香
秋風香の候ふ香る秋の香
秋風香の候ふ香る秋の香
秋風香の候ふ香る秋の香
秋風香の候ふ香る秋の香
秋風香の候ふ香る秋の香

二
西
全
川
其
菊
蓮
松
松

秋

行跡や世の有様の月より
 ゆく秋や星の光りや地の中
 行跡のそとへ入る船後處
 若木電の煙を待つる秋のり
 行跡や日もいづれと一ヶ月
 ゆく跡のふもをあらうと
 川跡よ白風もあらぬ梢の
 行跡は枝の送りや葉も
 ゆく秋や引きこもるさね
 行跡や車のねるぬう板
 行跡や家元後の大境

栗 葉
 雅 枝
 稻 海
 白 女
 桂 葉
 唐 平
 芦 月
 尚 古
 友 之
 斗 玉
 今 身

家元

行跡のまゝ月よりや山の家
 ゆく跡や秋のまゝ子の海
 行跡や何れか地の中
 ゆく秋や物もねるぬう板
 行跡や家元後の大境
 ゆく秋や引きこもるさね
 行跡や車のねるぬう板
 行跡や家元後の大境

栗 葉
 雅 枝
 稻 海
 白 女
 桂 葉
 唐 平
 芦 月
 尚 古
 友 之
 斗 玉
 今 身

孤之乳も程々月夜に
 張極や乳のうぬ子の元を
 秋を孔畝立ちく明廣の
 棟上の幣串言ふも秋の
 名とや木喰さく後さ
 折せさふいふもされてめ
 義の夢屋さくも程の世
 知るも折さくも人々の
 月夜も一ちと出るも理
 川舟も一ちと出るも光
 秋のや病乗さくも明

類題六

